

さざなみ

須崎市教育研究所 発行
第14号 令和8年2月25日

第3回不登校・不登校傾向対策委員会

2月12日、本年度最後となる情報交換会を開催いたしました。今回は、不登校児童生徒への支援をより強固なものにするため、対策委員、スクールソーシャルワーカー（SSW）、および支援センター職員が一堂に会しました。「役割をつなぐ」「来年度に向けた課題の共有」を目的とし、市内を3つの校区グループ（①須崎中校区、②朝ヶ丘中校区、③浦ノ内・南・上分小中）に分けて、より具体的で密度の濃い協議を行いました。



会の冒頭では、専門的な立場からSSWおよび支援センター職員の皆様にお話を伺いました。SSWからは、その専門性を活かした具体的な役割や学校現場で提供可能な支援のあり方について、支援センターからは、施設での日常的な活動や利用状況、行事を通じた児童生徒の変容について共有していただきました。これらの講話により、各機関がどのような強みを持ち、相互にどう連携できるのかを再確認する貴重な機会となりました。

続くグループ協議では、同じ校区の担当者同士で活発な情報交換が行われました。特に、支援の方向性に苦慮している事例について、学校側からSSWへ具体的な手立てを相談するなど、実務に直結する対話が見られました。不登校の要因が多様化する今日、解決への道筋に正解は1つではありません。個々の実態を見極め、その子にとって必要なのは「環境の調整」なのか「心の居場所」なのかを判断する上で、専門機関との連携は不可欠です。今回、3者が顔を合わせてざっくばらんに意見を交わしたことで、組織の壁を越えた「横のつながり」が一段と深まったと感じております。

来年度には中学校の統合、さらには数年後の小学校統合を控えており、環境の変化に伴う不登校支援の重要性はますます高まっていくことが予想されます。こうした転換期だからこそ、学校と行政が強固に結びつき、一貫した支援体制を構築することが重要です。年度末という節目に持てたこの機会を糧に、来年度も児童生徒一人ひとりに寄り添った支援の輪を広げていけるよう、決意を新たにしております。



【参加者の感想より】

- ☞SSWや支援センターの方と情報共有することができて、活用の仕方やセンターの活動内容など改めて知ることができました。どんな支援ができるか考えながら、これからも相談させてもらいたいなと思いました。また、このような機会があれば有り難いと思います。
- ☞今年度は新規不登校が8人増加と厳しい状況ではありましたが、各校の実態や悩みを共有する場を設定いただけで良かったです。話し合いの中で、不登校は悪なのか、登校・不登校にかかわら

ずつきたい力は学力と社会性（コミュニケーション能力）、本人と保護者のニーズに寄り添うこと、しかし伸ばした支援の手をなかなか受け取ってもらえない現状、それでも選択肢を提供し続けるという学校の役割など、様々なことを考えさせられました。保幼小中の連携強化や居場所づくりをする部会の立ち上げ、高校での不登校解消事例などお聞きして、まだまだ希望やできることがあると感じました。

☞ 不登校の児童も保護者も、声を自ら上げることが難しい面を持っていることが多いため、そういった点を理解したうえで、本人の状況や背景、ニーズをSSWやSC、担任、養護教諭など多くの人で共有し、どのような支援方法が今必要で有効なのかをチームで検討することが重要なのだと感じました。

また今回、同じ中学校区内で、学校の課題や取り組み、困っている事などを共有するができ、非常に有意義な会でした。本当にありがとうございました。また、議題を数個設定して下さっていたので、議論をしやすい、学びのある話し合いに繋がったと思います。次年度以降も、このような形で実施して頂くと有り難いです。

☞ 小中学校区で不登校の現状やSSWの動き、支援センターの利用状況、来年度に入学してくる生徒の様子も共有できてよかったです。年度末の小中引き継ぎ会で情報を聞き取り、新年度から実際に向き合って（不登校生徒・別室生徒・支援センター通室生徒など）本人の気持ちに寄り添いながら居場所づくり・環境づくりを準備していきたいと思います。統合で校区内外合わせて11校から生徒が来る予定なので、人間関係の構築や安心できる集団づくりを目指して、養護教諭・不登校担当者・特別支援学校コーディネーターとしてできる、分掌業務を最大限に発揮していきたいです。

☞ SSW、支援センターの方から「つなぐ」という視点で話を聞き、様々な関係機関との連携や最近の子どもたちの実態や課題・困り感などについて認識することができました。また、協議を通して縦横のつながりをもち支援会などの場を通じて情報共有を行うことや本人・保護者のニーズを把握し、状況に応じた介入やアプローチの方法を関係職種と話し合いながら支援を行っていくことが重要であることも認識しました。

☞ 欠席・遅刻調査より、2学期は学校行事が多く、参加しにくい子が不登校につながるわかりました。自校でも行事をきっかけに不登校になった児童もいるため、今後は参加しやすい行事の雰囲気、行事が終わったあとのモチベーションの保ち方等、工夫が必要だと感じました。また、同じ校区の養護教諭、SSW、支援センターの方と情報共有ができ、勉強になりました。自校では定期的な支援会を設定しておらず、役割をつなぐ部分が薄かったことに気がきました。情報共有はできていたとしても、児童にあったニーズを考え、どのように学習や人とのつながりにつなげるかまではできていないため、来年度から支援会の計画を提案したいと思います。

☞ 校区ごとに分かれてSSWの先生や支援センターの先生とゆっくり話をする機会があまりなかったので良かったです。校区別で情報共有や意見交換をたくさんできたので、来年度もこういう機会があると良いなと思いました。中学校校区の先生方と情報共有できて、良かったです。SSWともゆっくり話す時間がなかなか取れないので、今日の時間設定がありがたかった。大人同士がつながっ

ておくことが、とても大切だと改めて感じた。また、保幼小、小中の連携もしっかりしていきたい。

☞ 校区ごとに別れて、普段はゆっくりお話ができないセンターの方やSSWさん、各学校の養護教諭の方と意見交換することができて良かったです。また、改めてSSWさんの仕事内容について詳しく聞くことができたり、支援センターの役割や行っていることについてお聞きしたりすることができました。センター利用についての意見交換では、**地方の学校はどうしても送迎が必要になり時間に縛られてしまうため、来る回数が減ってしまう児童生徒がいたり、保護者の困り感の少なさによる対応の難しさなどが挙げられ、昔とは違った課題があり対応が難しいなど感じました。**具体的な対策が多く出てきたわけではないですが、こういった意見を交換するだけでも多くのことが知れたりするので、できれば学期に1回はこういう機会があるとありがたいです。また、今回のような校区別の会や支援会等を定期的に行えると、密に情報共有ができると思いました。とても有意義な時間でした。

☞ 支援センターの最近の動向を知る機会をいただけて、質問することもできました。今回のような小さい形でのグループワークだとお互いに知っていて話がしやすかったのではないかと思います。西森委員長も言われていた**「顔が見える支援」の第一歩だとも感じました。**それぞれの機関が様々な情報を持っており、対象者へもそれぞれがアプローチしているのが現状です。**バラバラな支援ではなく、統一した支援ができるような体制づくりが必要だと改めて感じる会でした。**

☞ 各学校の気になっている子どもの状況を共有する中で、それぞれに立場からこどものニーズや発信をどのように受け止めるかについて、支援は必要だが求める力、その認識がない子ども(家庭)の場合もあり、**それぞれの専門性から「気づき」を尊重し合い、前向きに共有し合うことの大切さ(チーム学校)を考えさせられた気がします。**その中で、先生方の支援や見守りについて率直な思いも知ることができ、各学校のアセスメント方法やアドバイスを出し合うなど共有し合えた点が共通理解となった気がしますし、今回このような場が先生方との「つながり」を深められるきっかけとなった気もします。大変貴重で学びが大きく、勉強になりました。今後子どもや関係機関との「つながり」の橋渡し、調整も大前提ですが現場で日々子どもたちに関わり、向き合っている先生の思いや相談に耳を傾け、信頼関係を築くことの大切さをより実感しました。先生方の支援に対する思いに寄り添いながらSSWとして何ができるだろう?と自分なりに思いを共有しつつ、**子どもが安心できる居場所に「つなぐ」役割が少しでもできるようにまず大人がつながる大切さを今回実感し、**大変有意義なグループ協議となりました。

今年度は、様々な面で教育研究所の活動にご協力いただき、ありがとうございました。来年度もよろしく願いいたします。

